

ハンセン病[元患者]作家 島比呂志氏の
社会復帰の3年9ヶ月追うドキュメンタリー

「生きてあれば」

の上映と岸上昭子氏のお話

誰もが想像を絶する人権侵害の中、ペンで語り隔離政策を告発し続けた作家島比呂志氏とそのそばで養子となり、献身的なケアをし続けた岸上昭子氏のドキュメンタリーです。元患者様の高齢化が進む中、待ったなしの今、岸上昭子氏のひと言ひと言から伝わる史実の裏側の「生の声」をぜひ聴きにきてください。

第一回 2026年3月21日（土）恵泉教会

第二回 2026年3月24日（火）茅ヶ崎市民文化会館
ミニホール（第一練習室）



提供者：共同通信 矢部拓郎

DVD上映

14:00～15:00

（開場13:30）

岸上昭子さんのお話

15:10～16:30

参加費：800円

お申し込みは
こちらから



主催：実行委員会 「生きてあれば」上映と岸上昭子氏の話聴く会
協力：ピースカフェちがさき、ソーラーハウスにしかわ、みんなの居場所びすたーり、
恵泉教会、チームみつばち、オーバルコミュニケーション

お問い合わせ：吉田繁子 09021704380
futagoza2017@gmail.com

プロフィール

島 比呂志氏

香川県観音寺市出身。東京高等農林学校獣医学科卒業。1940年、東京高等農林学校卒業後、満洲国立大陸科学院獣疫研究所に勤務。1943年、東高等農林専門学校（現 東京農工大学）助教授に就任。1947年、ハンセン病を発病し、国立療養所大島青梅園に入所。1948年、国立療養所星塚敬愛園へ転園。1958年より、同人雑誌『火山地帯』を主宰。1990年エイズ裁判原告赤瀬範保から「癩患者はなぜ怒らないのか？」という手紙を受け取る。これが島を動かすことになる。1995年、「患者の権利法をつくる会」事務局長池永満弁護士のもとに島比呂志の手紙が届いた。これが国賠訴訟のキッカケとなる。また、島が「法曹の責任」を発表。同年9月1日、九州弁護士会連合会（九弁連）へ申立「らい予防法・優生保護法について」を提出。九弁連は上記申立書を受けて人権擁護委員会（池永満委員長）が星塚敬愛園を訪問。島に聴き取りを開始。1998年島が「やっと燃えた怒りの火--ハンセン病訴訟・告訴宣言」を発表。1999年、社会復帰する。2003年、多臓器不全のため逝去（84歳）（Wikipedia参照）

岸上 昭子氏

1942年3月7日生まれ（84歳）

岸上（旧姓中谷）昭子は、裁判の第一次原告であり名誉原告団長でもあった作家の島比呂志〔本 名岸上薫。1918-2003.3.22.〕と養子縁組し島の社会復帰を実現させた。国家による強制・終身 隔離政策の当然の償いとして「社会復帰（希望）者が、安心して社会生活に戻れるように」条件 整備を行う義務があると主張した島の一貫性、人間島比呂志の思想と実践を統一させる（完成させる）ために尽力した。地域における草の根の運動に意義を見出している彼女の働きは、北九州 市小倉南区内で「療養所で出て来たい人がいたら、みんなで引き受けようよ」という声上がる までに至る地域社会を変容させる原動力となった。長年交流のあった昭子氏のすばらしい援助のたまものである。（多元的世界における寛容性についての研究：今滝憲雄 2004/10/15 Newsletter No.9参照）

今から、20数年前のこと、岸上昭子さんから、ビデオをプレゼントされました。『こんなことがあったのか！』『なかったことにはできない』と強く思いました。PCで検索すれば、問題に触れることはできるものの、史実に隠れたドラマがあるものです。ハンセン病問題と真正面から向き合い、元患者様が安心して社会生活に戻れるように様々なところで支援し、尽力を尽くした岸上昭子さんを紹介したく、、『こんな方がいらっしゃるんだ！』『寄り添うって、こういうことなのか！』と思いました。今こそ社会の中でおきている様々な問題を考えた時、その根っこには『人権とは何か？』と、問われているような気がいたしました。

実行委員会

吉田 繁子